

⑥ E 「転換期を読む」を読む

2003年6月28日 石積

神島二郎の「転換期を読む」は1994年1月末、6回連載で東京新聞に連載された。晩年の社会的発言のひとつであった。1「政府と国民の距離が遠い」2「田中政治の遺産」3「高度情報社会の問題」4「混迷に対処する道」5「行政改革」6「エリートの大衆回帰を」と題されたそれぞれの短い論文は、評論としては密度が濃すぎて新聞読者が完全に理解できたかいささか疑問である。(注、実際私はこの評論文を私の勤務する神奈川大学の3年生4年生の演習で何回か教材として使用したが、私の解説無しでそのままの形でいきなり討論に入るのには明らかに無理である。神島は生前、わかりやすい文章に関して次のようなことを述べていた。「確かに今までの社会学者はことさら難しく、難しく書く傾向があった。最近はわかりやすく書くことが大切であるというところまで言われている。そのように努めなければならない。しかし内容が難しいものを、真に新しいものを簡単に書くというのには限度がある。本当に難しい問題を考える際は、やはり難しい言葉も、新しい言葉も、慣れない論理展開も必要になる。)」しかしそれにしても神島の鋭い、深々とした状況認識は確かにこの小論文の中に凝縮されており、状況の、部分ではなく総体を論ずる神島に改めて驚愕し、畏敬する。

8年前の神島の日本分析はいったい今でも妥当性を持っているのだろうか？もう一度この論文を読み返しつつ現在進行中の問題に対する新たな分析を試みるのがここでの主眼である。

上記論文1, 2, 3, 5, は国内政治、社会問題を扱う。4は国際政治の問題であり、6は総括的に神島の政治理論の一端の紹介である。ここではまずそれぞれの論文について、今日的妥当性、それらが指摘する問題のさらにその延長線上で何が議論されるべきか、について考えてみたい。そしてできればその後、各論文の咀嚼を踏まえ、神島の論点を、さらには私の問題意識を再構築することにした。

1 「政府と国民の距離が遠い」

一 政府と国民の距離が遠い

神島 二郎

わが国の議会政治はすでに百年以上の歴史をもち、第一次世界大戦後の占領下には民主化が強力に押し進められ、衆人環視のもとに議会が国民に開かれ、政府は国民にさらけ出され、形は変わった。にもかかわらず、今日ではそれが国民とはほとんど無縁なほど遠く存在に近づいた。はつきり見えない。テレビを通じて時々刻々うるさいほど政府・議会の行動が透り見られているからであるが、人々の思い、人々の懸念はほとんどそこには届いていないらしい。ところが、多くは思いつかない形にひん曲げられて実現されるのがオチといったところだからである。政治腐敗は金九問題でやっとヤマ場を越えたとと思ったら、ゼネコン汚職の機軸が仙石から始まって茨城に及び、また仙石へ、というくどいにも懲りない有様で、腐敗の根柢こそ刻下の急務と人々はやめたが、改革の動きはそれとはまるでも違っている。

七月総選挙中では腐敗の根柢と政権交代が懸えられていたが、選挙が終わると、非自民政権が新生党小沢一派代表幹事主導で、準備不足の日本新党細川代表を担いで、あつという間に腐敗防衛と選挙制度改革とを以てした政治改革を議題に上り上げられた。選挙に先立つてはやばやと目のレゾネントを棄てて自分から地盤を縮小した社会党はお連立与党内第一党でありながら、閣内ポストを得ただけで政策的には抜け隊のようになってしまった。ポストだけに終結した腐敗があまりにも永かつたせいであろうか。こんなことは普通ありえないことである。なぜだろうか。

私と考えれば、民主主義は力点のおおき所によって三つに分けられる。第一は意見の傳達を基礎にした「世論」。民主主義。第二は地位の移動を基礎にした「出世」。民主主義。第三は直接面接触を基礎にした「接触」。民主主義である。民主主義の理念は自由、平等、友愛といわれるように、民主主義である以上、いずれの側面をも含ませ持っているけれども、それぞれ基調とするところを異にしているからである。

西ヨーロッパの議会議制と民主主義は世論民主主義である。明治以来日本はこの制度を導入してきたはずであるが、その定着の過程でいちいち出世民主主義に傾斜し変質した。第二次大戦後、日本は占領下に民主主義導入の仕切り直しをした。ところが半世紀経つたまともなように改質した。蛙の子は蛙としよう。戦前、出陣の王道は官僚コースで、議会議制はパスコースにすぎなかった。戦後は議会議制を中心とするすべての出世コースが廃散させられ、しかも大層なことはその頂点に「上」(出世)が形成されたこと。「上」集団の形成には天皇が利用されている。叙勲とか、天皇主催の宴会や園遊会、地方へ旅行の送迎とか、厚誼いろいろだが、要するにそのさいのさいの過当ランク付けに利用されて一般の市民がき上がっている。この点は戦前と変わりない。かつては政・官・財、まづお金の力、三者それぞれ強と弱があり、そのために結びついてきた。かたが、今日ではそれが一体化して「上」(出世)「上」(出世)をつくり、身分的に世襲化・固定化が図られる。かかれの多くは下々の出たが、出世の過程で一段昇ることにも身も心も変質して「上」が形成される動物となり、下々を見下してはばかめ存在になっている。下からは見えぬが、脱し階級分化である。下々の人がかかか固まりしよう、どうしようもない存在になっている。それが「政・官・財」複合体である。

しかしながら、議会政治の面では、「選挙で当選すれば議員だが、落選すれば只の△△といわれるように、政治家は「離れた「上」(出世)「上」(出世)のど真ん中に居ながら、選挙の洗礼を受けなければならない。下々の人がかれらの正体を見たり、政治責任を問ひ、選挙で落すとすることを忘れえしなれば、弊害の除去は可能である。もちろん懸念することはないのである。

(一九九四年一月十八日、東京新聞)

- * 三行目「テレビを通じて時々刻々うるさいほど政府・議会の行動が逐一報じられている」という点について。今われわれの眼前で繰り広げられている事態はもっともと危機的である。神島が生きていたならどういったらうか。先日参加した「国会TVを救う会」で民主党仙石議員以下参加者が、口々に現在の危機的状況について述べていた。以前はスカイ・パーフェクト・TVのなかで国会中継専門のチャンネルがあったが、これが不可能になった。現在裁判で争っているが、明らかにこれは視聴率のみにこだわる、行き過ぎたTV界の問題であり、何らかの政治的意図、圧力の存在が背景にある、ということであった。いずれにしてもTVという媒体において急速にその情報伝達能力・機能が衰退しているというのが討論者全員の意見。この会合には超党派とはいいいながら社民党・共産党の議員が参加していなかったのは少し気になる。どちらにせよ神島が「うるさいほど情報があふれる」というようなものではなく、絶対量としてもここ数年急速に後退していると思われる。
- * 選挙制度改革=政治改革と主張した人々は今いったいどう総括しているのであろうか。佐々木毅、それと一緒にマニフェスト運動をや

ている北川盛況、自由党の民主党との合体に望みをつなぐ小沢一郎、高野猛、田原総一郎、みなちゃんとりあえずの総括をしているのだろうか。「とにかく変えてみよう、変えてみて不都合であったらまた変えればいい」などと安易に論じていたオピニオン・リーダーたちはこの10年の政治空白をどう総括するのだろうか。彼らが思い描いていた2大政党制もできず、政治の矮小化はどんどん進行し、それと同時に進行する経済の停滞、弱体化をどう考えているのだろうか。それにしてもあの改革論議の中で最後の最後の局面で土井たかこの果した決定的に軽率な役割について本当はもう一度問いただしてみる必要がある。

- * 4ページ4行目の最後、「なぜだろうか」については結局この文章では答えを書いていないのではないかと。別の論文「社会党は幻だった」で詳しく論じているが、神島はそれとこの文章をやや混同していたきらいがある。だれかこの「なぜだろうか」についてこの文章の文脈で説明をしていただけたらと思う。
- * 5行目以降は本来のこの回の標題「政府と国民の距離が遠い」の根源的な理由について述べているものである。三つの民主主義については私も学生相手に頻繁に語る。つまり出世民主主義の中で、かつての庶民、常民、市民がその出身母体に対する絶えざる裏切りのプロセスで距離を作り出すというその構造である。(ところで神島の提示するこの三つの民主主義類型は私自身には大変わかりやすいし、独創的であるだけでなく、きわめて的を射たものだと思う。じつは神島もこの類型論を結構気に入っていたのではないかと思う。回想『神島二郎』p179の飯田泰三氏の文章を読みながらふとそんな感じがしたのである。)
- * 出世の階段を上中での変身と、結果としての鋭い階級分化の問題についてはもう一歩踏み込んで考えておく必要がある。それが「政・官・業」複合体であることはわかるが本当にこの出世主義なるものが、ただいま現在の日本国で依然として息づいているのだろうか。どうもそこに疑問がある。大きく変化しつつあるのではないかと。ただ一方では隠れたお上集団とか鋭い階級分化とか(研究会で取り上げた『階級社会日本』)の実態もあるとは思う。ここのところはもう少し考えを深めなければならない。

2 「田中政治の遺産」

二 田中政治の遺産

田中政府は、残存をがら、功よりも罪が大であった。以前私は、田中角栄がかれより二、三十年下で同じく戦争と戦後の時代にちやうど決定的な軌跡を辿った鉄面「ゆきゆきて、神童」の主人公で、死んだ戦友の視点で戦後日本を弾がいた幾藤三三と対照しながら論じたことがある。いずれも時代の社会の極点を洞察するに格好のチャンスと掴んだが、はたしては共通しているのが、輿論がそれを預め重ねてそれを総括と対決するよりに対して、田中はそれその都度、すばやく自分のために利用して出世のしごを一番に駆けつけて出た点でまさに天才的であった。

一九五五年に左社会党の革新統一と自由・民主の保守合同によって成立した五体制は当初一歩進み、いわれた「一五五五」の憲法改正の道を歩み、金権支配・保守独裁といわれるようになった。この間にキングに金権支配を完成させた。そのための、ロッキード事件で退陣を余儀なくされたが、派閥とて超多数を擁してキング・メーカとなり、国会をハイジャックすることに成功した。「ヤミ将軍」といわれた所である。外からは正常運行のように見えるが、内閣内閣の各日に至って、実を言つと、腐敗が蠶室に金権支配が怒りの渦に巻き込まれても、最後まで政権を保持し安定政権たりうために田中が考えた選挙制度改革は小選挙区制であり、今問題になっている選挙制度改革はほかでもないその流れに追いつたものである。腐敗防止の徹底を求められ国民の要求はおもむくは、それどころか、連に人々の怒りと要求を案じて踏ねのけられるように実され仕組んだといってもよいのである。

ところで、金権政治は、いかなれば公の制度の外で超日常的な贈与と政治家に対しては選挙妨害、官僚に対しては組織系統無視、マスコミに対しては情報拒絶等々の受けつないじりという憎け容赦のないアメとムチで人を操縦してしまつても、そうした手段手段に連和感を受えぬ知識人よりもより一人一人をとってみればいずれも弱い立場ではない。まして高層情報社会といわれる今日の日本で、それがそのまま人々の眼前に露出して無事通りおけるはずはない。ところが、消えたかと思つたところはさらに深部に潜行し、性根りもなく、繰り返される腐敗に慣れた人の腐敗防止を求める声よさらに、それへの答えをすぐらに政権交代にすりかえ、それを可能にするという理由で小選挙区制導入への選挙制度改革にすりかえてゆくことが、どうしても離れにできないのである。

その点で、立法・行政・司法三種に對して第四の権力といわれるマスコミ、殊にテレビが協力していたことを見逃すことはできない。政治は人々の集合衆数、つまりはまとまりにかかわるもので、近代以降の権力集中に対する民主化の過程で、以前は、うわさ、とか、世間話、という形でそれぞれその過程に内在していた情報源が分離独立し、本来はどちらからかといえば後者を主とし、前者を従とし、民主化の所産としては、前者に重点を置き、政治的には下からの視点点を欠かれないはずであったが、この間のマスコミは第四の権力となるべき視点点を欠落して体制内化していき、その部、政治部が体制の先頭をゆくハイジャッカーに取り込まれ、マスコミだけではなく、それについてその中で活躍していた知識人も取り込まれて、批判的の知性が見失われたらうにみえるのは、残念なことである。

(一九九四年一月十九日、東京新聞)

- * 田中政治の功罪について神島は「功よりも罪が大であった」と断ずる。田中は上述の出世民主主義での裏切りのプロセスの一例であろう。しかし田中に対する評価はもう一度別の角度から考えなければならぬとも思う。田中は「今太閤」と呼ばれたが、彼の中にある常民感覚は最後まで保持された(?)。今日の日本における政治的空間の希薄化を招いたのはやはり第一に官僚ルートであったと私は考える。あるいはその官僚ルートを戦後も清算することが出来なかったことにあったと考える。田中は明らかに官僚ルートに対する<挑戦者>としての魅力も持っていたのであり、そのDNAを受け継ぐ真紀子もまたそうした側面を持つ。ここは実は田中を考える場合の最も重要なポイントかもしれない。つまり田中は一見個々の官僚をコントロールしたかに見えたが、もう一步視界を遠くに置いた場合、じつはもっと大きな日本における官僚パラダイムの中で踊っていただけかもしれない。
- * 「今太閤」はしかし議会制民主主義の何たるかをついに本質的には理解できなかった。それが彼をしてヤミ将軍にする。国会ハイジャックのその経過と、そこにおける政治不在の問題はややもすれば忘れ去られてい

る面が大きい。竹下、金丸、小沢、そして細川までその流れが続く。日本のわれわれの健忘症は何とかならないものかと思つづく。

- * 現在行われている小選挙区比例代表はある意味ではじつに中途半端な制度であるが、小選挙区制を田中が考えていたことは小沢にも大きな影響を与えているはずである。
- * 金権政治は公の制度外での超日常的な贈与と選挙妨害、情報拒否などになるがそれに違和感を覚える知識人、下々の存在をその視野から排除した政治である。
- * とにかくにも神島政治元理表を手がかりに日本の官僚政治と、それにある意味では挑戦しようとした田中の問題を考えることは大きな意味がありそうだ。金権政治は基調としては同化の元理であると神島は論ずる。私も同意する。官僚政治は本来は法の元理で成り立つもののだが(したがって最近流行のオンブズマンや政治の透明性を求める動きは本来の法元理の達成という方向で動いていることは間違いない、神島の元理表の改定・考察の中で・・・つまり晩年になってなぜ法元理を入れたか・・・最近のそうした動きへの注目があつたとしても不思議ではない)日本の官僚制度はその法の元理が極めて弱い。おそらく日本官僚制は婦郷の元理の多くを含み持っているであろうし、知己のある部分を併せ持つだろう。この官僚制度に抗した田中はもっぱら同化の元理で攻め立てたのであり、時には婦郷(田中の田舎育ちが機能する)や闘争をおそらく持ち出して籠絡しようとしたのだろう。ともかく田中は自治の元理で日本的な官僚政治に対峙したわけではなく、それこそが彼にこの日本政治文化の中で大きな力を与えたのであろうし、同時に逆に彼の限界があつたのであろう。彼が自治の元理の何たるかを血肉として内面化していたならば、田中の革命はさらに大きく展開していたのだろう。

3 「高度情報社会の問題」

三 高度情報社会の問題

昨年九月、民間放送連盟の放送番組調査で、テレビ朝日の情報番組部長が、細川政権の誕生までの動きを誘導したのはテレビだといったことをもって、「不慮不党」公正と、そのことについて論議が巻き起こった。野党自民党の要求も民間放送のテラフと議事録が郵政省経由で国会に提出された。政治改革調査特別委員会に権氏が出席されたが、本人が思い上がった荒唐無稽な発言と認められた。しかし、この経過について、これは言論の自由と放送の公平にかかわる問題、本来はこのように性急な政治刷新化させたのは誤りで、言論界で論議を尽くしておもむろに結論を出すべきであつたか、放送は、新聞とは違つてすぐれた電波を使つたから、公平が問題とならざるをえず、放送の許認可権は政府が独立した公正な第三者機関に委ねられるべきだといったことが論じられたのはよかつた。

しかし、ともあれ、今日のマスコミ、ことにテレビの政治に及ぼす影響はきつめて大きい。新聞の影響も大きい。最近テレビがその要求を超えた。テレビ朝日の事件は政権を離れた野党自民党の要求に海を越すが、政権党のテレビ報道への介入はもちろんだ。広告スポンサーの介入も問題である。しかし、いずれにせよ、テレビと政治の間わりについて当事者に掘り下げた現実認識が欠け、報道が流れていかにさざめく面があることを認識できないような状況が誘導できるとうまくいけば、「とにかく変えてみよう」などと考えたにちがいない。

さてここへいま一つ、テレビ時代の政治問題を取り上げよう。かつて私は、近代化の過程で崩壊していった自然村、これに代つて擬似自然村を第一のムラに對する第二のムラとして問題視した。第二のムラの典型として私は黒人社会と学校の同窓会をあげ、のちにこれに職友会を加えた。第一次大戦後、戦後経済の混乱期に外地から引き揚げてくる人々を収容して企業は一種の会社コミュニケーションとなり、それを経て勤め先共同体のようなものが出来た。これには退職した0日も含まれる。それは自然村とはよほど違つていゝ。というのは、コミュニケーション時代ともかく、それを経過した後ばかりで残像を利用した攻撃が始まつたからである。さもなくば、猛烈社員や過労死など、ありようはずがない。

これと同様に、自然村とはまったく切れたところに、テレビを媒介にした共同幻想、「一億一村」とよばれるものが生まれた。これは日常的に茶の間に入り込んで知らぬまに個人を介しておおせたテレビ、タレントを中心に出たものであるから、いつてみれば「一方的な片思いの幻想の産物で、その点では、今日かなり普遍的にある天皇幻想とよく似ている。

私は戦争中、仙台の子佛十哲学校に在学したが、古武士のよな校舎は講話の中で、「忠」というのは君がいとしいということだといった。観念の中でのみみたすから純化され悲しいほどに純粋な片思いであるから、それは一切を超越して語るさく、容易に崩れこまない。専ら勤王の志士全国を調査し、「忠」(天皇)を悪いとしたことの孤忠に生きたのは、まさにこの片思いの純忠である。それは一般的には朝野の感嘆、かほれば千朝千夜の伝統にながらざる。これを手近に求めれば、ファンの構造が似ている。もちろん、その集団化を促し、熱が冷まないよう補強することはタレントの側からなされるが、考えみれば、そういうことは皇朝からいってもけんがある。たしかに中心からの環境づくりはできるけれど、それよりもはるかに重要なのは未開周辺からの支えである。

しかし、そこには、メディア空間を不可欠とする場合とそれを超えて直接の接触合いに持ち込める場合との違いがある。根をいうと、天皇制は、さかのぼって過去を探るすべしではなく、同じく現在、高度情報社会そのものから探るべき問題の発端が必要なのである。

(一九九四年一月二十日、東京新聞)

- * 7. 8年前の政変劇、選挙制度改変にTVが大きな影響力を持ったことはもう一度思い起こしておくべきであろう。田原総一郎も久米ひろしも、そこに登場した多くの評論家・政治学者も、まるであのことについて多くを語ろうとしないが、これは自らマスコミ・テレビの無責任性を公言しているようなものである。神島が言うように、<いづれにせよ、テレビと政治のかかわりについて当事者に掘り下げた現状認識が欠け、・・・「とにかく変えてみよう」などと考えたに違いない。> のだったが、そのことに関する反省無しに、同じ当事者が顔を出し続けている。このことがどれほど国民の政治不信、言語不信に繋がっているか、これは本当に大問題である。
- * この文章でのもうひとつの大きな論点は「<テレビを媒介にした共同幻想>がタレントを中心にしてできているが、これが今日かなり普遍的にある天皇幻想と似ている」という指摘である。これを、いづれにしてもファンの構造として神島は捉えるが、政治元理表上の<人心>の問題である。この点でいえば次の二点に考察を進めるべきであろう。共同幻想の日本の特殊性の問題とメディアの機能である。

4 「混迷に対処する道」

四 混迷に対処する道

世界は過渡期で、目に見えない激動と目に見えない静謐が動いていて、ここではだれにも分るが、そのありようがまだかでない。そのような状況に対処するにはどうしたらいいか、主体の自己認識、これである。外的状況がどうあろうと、これに立ち向かう主体が自身の姿勢がまず問題からである。状況についての的確な情報がいかに豊富であったとしても、主体の自己認識がなければ、どうにもならない。」

今日、日本および日本人の自己認識にとって重要な第一は、第二次大戦の敗戦をどう受けとめるかということである。第二次大戦は、日本が始めた満州事変から大東亜戦争まで、その最後を重んじて日本の敗北に終わる戦争である。その受け手たる方はその後の歴史的諸段階へのすべの対応にかかわる。それだけではなく、ほかならぬ今日只今、未來に向けての態度決定をも左右するものである。

第二次大戦の終結は、本来なら、その帰結として近代国家形成立以来の「力の論理」そのものが問われる可能性をはらんでいた。そしてその可能性が切り拓かやすかったのは、いわゆる「総力戦」に國民の肝膽をあげ、血液を絞り尽くして敗れた敗戦國民であり、まさにこの「力の論理」に従って勝利を得、凱旋を花吹雪で祝った戦勝國民ではなかったことは、歴史のアイロニーである。

戦勝連合国は、戦後、国運をつくり世界平和と安んずることを求めたが、これもまた「力の論理」に従っていたのである。もちろんそれなりの成果を取ったとはいえないことはいわゆる「冷戦」の陰で、そのため連合国は経済と財政的窮乏、結局はベレストリョクを余儀なくされ、冷戦の終結、ソ連と東欧の崩壊、そして地球的の大変動となった。

これに先立ちアメリカもアジアでベトナム戦争にかかわって敗北し、近代以来の国家が拠って立つ「力の論理」にかげりを経験し、経済的にはかつての戦勝国も日独に後れを取った。こうして敗戦と衰退を経験することで、ようやく戦勝国も戦前と同様に並ぶことになった。正直に言って、これが大きな流れのあらましである。

日本は敗戦の結果、日本国憲法を得、第九条の制約が経済の高度成長を可能にした。しかしながら、一九五五以降自民党が半永久政権を保持し、一貫して軍事的力の増強が図られ、目標は「普通の国家」におかれ、国家が拠って立つ基礎は依然として「力の論理」であった。

昨年八月、三十八年ぶりに非自民、細川政権が成立し、やとあの戦争を侵略と認め、軍艦に向かうかのように見えた。しかし、陸の要力者はあいかわらず「普通の国家」を目ざしており、政権の行方は不透明で、これに対するアジア諸国の気持は深い。

侵略戦争だったと認めることは、この戦争で死んだ同胞はすべてムダ死にだったと知ることである。戦死も戦死も、すべてムダ死にだと認めることは、この戦争で死んだ同胞の恨みをすべて、侵略戦争で死んだということとは、真に死の立場に立たずなら、魂を切り刻む痛恨、それ以外の何もでもない。生き残った者にとって必要なはこの痛恨を忘れないこと、その気持を同胞の死にだけなく、戦争、犠牲になつたすべての死者に及ぼすこと、なにかんぞく強硬された日々々の犠牲者に、さらにもついで「力の論理」に存在せざるをえない近代の国家原理そのものを否定し超克すること、それが自己認識の原点である。

集団はなおその線にたどり、かれのいう「国際化」は「力の論理」に基をおく国際協力に止まっている。その中で旧式の国家原理そのものを超えようとする動きがいま市民の中に、「憲法九条を世界に拡げよう」という運動として始まりつつある。そこに新しい希望がある。

(一九九四年一月二日、東京新聞)

- * ここでの議論はもっぱら国際政治にかかわるものである。世界が過渡期であるとの基本認識の中で、それに対処するには1にも2にも<主体の自己認識>であると論じる。「状況についての的確な情報がいかに豊富であっても、主体の自己認識がなければ、どうにもならない」との神島の言葉は今こそ重い。この小論の中で、神島はほかの文章で繰り返し繰り返し主張する「力の論理」の限界、憲法9条の可能性を述べるが、このことについては石積論文「近代西洋政治学」でパラフレイズしているので解説は省く。

なおこれとの関係では次の・・・5 行政改革・・・第一段落「戦後日本は・・・国民がこれを納得して受け入れたからである・・・」の指摘には神島の確信が現れている。今回のイラク進行の事態に対して、そしてその後の日本の防衛論議に対して、今こそ神島が必要であった。神島亡き後、急激に進む「普通の国」化に対して、急ぎ、理論武装しての発言が必要だ。

- * <イラクの自由作戦>と、それにまつわる政治状況は何を意味している

のか。大きく纏め上げて言えば、世界全体の近代への後退ということではないか。日本もいよいよ明確に「普通の国家」への道を歩みだしたといえる。民主党しかり、小泉人気しかり。米英に反旗をひるがえした仏独の腰砕けもまたついに近代を今回は乗り越えることができなかったということであろう。(その意味では仏独口の行動でより重要だったのは進行前の抵抗よりアメリカの終戦宣言後の行動であったのではないか、これが腰砕けという意味である。世界中で巻き起こったデモも今は跡形もない。しかし逆に米英で始まっている議会における情報操作問題に対する追求は大いに注目に値する。この面でも日本はマスコミも、市民もはるかかなたにいる。近代を乗り越えるどころの騒ぎではなく、やはり日本は前近代としか言いようがないのではないかと絶望的になる。)今週3年生のゼミで憲法9条を読んだ。そして議論した。最終的に改憲すべしと答えた学生は20名中の実に20名。これが日本の現実であると肝に銘ずべし。神島が生きていればどのように発言しているか、大いに興味あるところ。

- * ただ国連安保理での第三世界の国々のとった態度には「力の論理」から「モラルの論理」への動きもまた見て取れる。この部分は注目に値する。

5 「行政改革」

五行政改革

戦後日本は、占領軍に日本国憲法を押しつけられ政府と憲法は一貫して憲法改正を叫び、占領軍とその後のアメリカが「監視」してこれを容認したにもかかわらず手続法第9条が保守されたのは、國が保持してこれを受け入れたからである。國の力は鋭く、この選択は正しかったと神島は論ずる。権力を握るものも結局<迂回>してこの動きに合流せざるを得ないと神島は論ずる。この迂回の役割を担うのが官僚であると断ずる。官僚が公僕に生まれ変わる機会

は二回あったが(戦後、70年代)だめだった。その中で民主的制度的反民主的なソフィステケーションが進み、現在日本の公務員は国家、地方とも、まさに封建以前と断ずる。私も基本的に同意見。

* 「封建以前」(13ページ後ろから二行目)とは過激である。今神島が生きていたら田中康夫の果敢な挑戦にきつと最大級のエールを送っていただろう。「官僚を普通の人に戻すためには許認可権の問題にメスをいれ、地方委譲をし、天下りを禁止する」。これすべて今話題の構造改革の実は決め手なのである。このセクションの文章は実に密度の濃いものになっている。一行一行について具体例を挙げながら論ずることではじめて彼の認識の鋭さに思い当たることになろう。行政改革と一口に人々は叫ぶが、実はこの神島流の透徹した問題認識がないから具体的な改革の

新期である。

第一の時期は、占領軍に日本国憲法を押しつけられ政府と憲法は一貫して憲法改正を叫び、占領軍とその後のアメリカが「監視」してこれを容認したにもかかわらず手続法第9条が保守されたのは、國が保持してこれを受け入れたからである。國の力は鋭く、この選択は正しかったと神島は論ずる。権力を握るものも結局<迂回>してこの動きに合流せざるを得ないと神島は論ずる。この迂回の役割を担うのが官僚であると断ずる。官僚が公僕に生まれ変わる機会

は二回あったが(戦後、70年代)だめだった。その中で民主的制度的反民主的なソフィステケーションが進み、現在日本の公務員は国家、地方とも、まさに封建以前と断ずる。私も基本的に同意見。

* 「封建以前」(13ページ後ろから二行目)とは過激である。今神島が生きていたら田中康夫の果敢な挑戦にきつと最大級のエールを送っていただろう。「官僚を普通の人に戻すためには許認可権の問題にメスをいれ、地方委譲をし、天下りを禁止する」。これすべて今話題の構造改革の実は決め手なのである。このセクションの文章は実に密度の濃いものになっている。一行一行について具体例を挙げながら論ずることではじめて彼の認識の鋭さに思い当たることになろう。行政改革と一口に人々は叫ぶが、実はこの神島流の透徹した問題認識がないから具体的な改革の

は二回あったが(戦後、70年代)だめだった。その中で民主的制度的反民主的なソフィステケーションが進み、現在日本の公務員は国家、地方とも、まさに封建以前と断ずる。私も基本的に同意見。

* 「封建以前」(13ページ後ろから二行目)とは過激である。今神島が生きていたら田中康夫の果敢な挑戦にきつと最大級のエールを送っていただろう。「官僚を普通の人に戻すためには許認可権の問題にメスをいれ、地方委譲をし、天下りを禁止する」。これすべて今話題の構造改革の実は決め手なのである。このセクションの文章は実に密度の濃いものになっている。一行一行について具体例を挙げながら論ずることではじめて彼の認識の鋭さに思い当たることになろう。行政改革と一口に人々は叫ぶが、実はこの神島流の透徹した問題認識がないから具体的な改革の

は二回あったが(戦後、70年代)だめだった。その中で民主的制度的反民主的なソフィステケーションが進み、現在日本の公務員は国家、地方とも、まさに封建以前と断ずる。私も基本的に同意見。

* 「封建以前」(13ページ後ろから二行目)とは過激である。今神島が生きていたら田中康夫の果敢な挑戦にきつと最大級のエールを送っていただろう。「官僚を普通の人に戻すためには許認可権の問題にメスをいれ、地方委譲をし、天下りを禁止する」。これすべて今話題の構造改革の実は決め手なのである。このセクションの文章は実に密度の濃いものになっている。一行一行について具体例を挙げながら論ずることではじめて彼の認識の鋭さに思い当たることになろう。行政改革と一口に人々は叫ぶが、実はこの神島流の透徹した問題認識がないから具体的な改革の

は二回あったが(戦後、70年代)だめだった。その中で民主的制度的反民主的なソフィステケーションが進み、現在日本の公務員は国家、地方とも、まさに封建以前と断ずる。私も基本的に同意見。

* 「封建以前」(13ページ後ろから二行目)とは過激である。今神島が生きていたら田中康夫の果敢な挑戦にきつと最大級のエールを送っていただろう。「官僚を普通の人に戻すためには許認可権の問題にメスをいれ、地方委譲をし、天下りを禁止する」。これすべて今話題の構造改革の実は決め手なのである。このセクションの文章は実に密度の濃いものになっている。一行一行について具体例を挙げながら論ずることではじめて彼の認識の鋭さに思い当たることになろう。行政改革と一口に人々は叫ぶが、実はこの神島流の透徹した問題認識がないから具体的な改革の

(一九九四年一月二六日、東京新聞)

道筋が出てこない、これが問題だ。

- * それにしても官僚は官僚でしかないことを、もう一度我々もしかとかみしめておかなければならない。官僚はその性質上、＜勤が鈍く、旧にならずみ、時の流れに疎い＞のである。決まり文句のように「政・官・業」の癒着構造打破とか、政治の復権とかいうが、そしてそれはそのとおりなのだが、なぜ日本のこの構造がまだ打破されず生き続けているのか、そこをところをもっと厳しく考えなければならない。政治の問題は勤を鋭く、進取の気質を持ち、時の流れに敏感な勢力をどう構築することができるかということにかかっている。この点でいうと長野で起こったことは重要である。勤の鋭い作家が、やはり勤の鋭い実業界の人と一緒に次の時代を切り開こうとしたことにこそ意味があるのである。

6 「エリートの大衆回帰を」

六 エリートの大衆回帰を

冷戦の終結後、国民国家の「亡霊」がさまよっている。それは民族と「力の論議」である。民族は国民と同じくネーションの言語だ。それは近代の国民国家の形成とともに出てきたもので、既成の国家を継ぎ、内外にそれとすれ政治統一を求めようにもなる。民族はいずれにしても同化・同質の純粋化志向をもち、フョークロアのフョークに当てられる日本語は常民で、異質・雑多の共存志向をも。

このよう考へると、庶民は小さなまとまりから人類にいたるままであり、民族は近代以後の固い統合を求めた国民である。それらに対応する政治はおそらく多様で複雑なものである。期待できるのは民族より常民ではないかと私は思う。

政治は人を動かす手段の体系だといわれるが、人を動かす手段たりうる形體的な事実の論理、それを「(理)」と呼ぶならば、いつかの原理を組み合わせてシステムができ、具体的な政治体形成される。その場合、政治の組みあわせはさまざまであり、固定したシステムはない。たえず入れ替わり、変化している。そのよう入れ替わりと政治の現実がはじめて理論的に捉えられる。

基本的な原理は少なくとも六つある。闘争、支配、自治、同化、カルマ(業) おび傾向である。いずれのシステムも、原理の組み合わせによって力点のおき所が違い、当該政治社会で力点がおかれた原理は認識しやすい。

政治は人を動かすことだから、そこでは、動かす側と動かされる側とに別れる。それが「お上・下下」の土間係である。その分かれ方は固定的から非固定的まで、きつても緩くもあがり、手段も速くも遅くも変えられない。歴史的には固定から非固定へ、敵から緩へ推移する傾向がある。近代国家は人間をも兵器にした暴力組織・軍隊を基礎にし、暴力・武力を最後の切り札とする支配原理に依拠した。

しかし、暴力の発動は極力回避され、政治学ではそれを「暴力の経済」と呼ぶ。ということとは、歴史的には既支配原理の傾向があること。民主主義は原理的に自治と支配とから成るが、その間に矛盾・対立がある。

自治原理によって重要なのは世論の形成とその行だ。そのためには、対話・討論、会議の練習が必須だが、明治以後日本はこれを怠った。戦後一時その育成を努めたが、たまたまそれを廃した。議会がもとでないのはそのためであろう。

人はは佛向(佛)の理の最後の切り札になるが、これは世論とは違ふ。世論は人々の討論過程でつくられるが、人心はいかなれば集合的な感情的流れであって、今日不得要領ながら軽視できない。内閣の支持率は人心に近いが、人心は世論とはいずれも下から出てくる点では同じである。人心は耳目に触れる感服を機軸にしているから、マスコミ、このテレビが役立つ。重要なのは、それにさらされ時間が増えてきた長いこと。その中でキングドムと天皇さまと同じ、社会主義圏と独裁圏の元音が使う肖像戦略もそれだ。過去の経緯からそのプロセス・マインドは慎重に検討が必要だろう。

天皇は議金政治からも離れ、おそらく京都へ帰ったほうがよい。逆に政治家は議金政治の真正面から取り組み、安易に天皇を利用しないことである。金権政治は金と権の政治だが、骨し使うのは支配原理で、金を理るのは同化原理だ。支配原理が補完にあるはずなのに言及しない。同化原理は議金政治から完全に排除しなければならぬ。過去イギリスではそうた。憲法制度の改革などはその後に行き。

また、最後に一言。政治社会にエリートは必要不可欠だが、エリートをも「お上」入とさせて固定化するのには最悪といえよう。「下下」の中にたえず引き戻さなければならぬ。そのためには、政治家に「重」の定期制(第一は在職十年を年限に、第二は六十五歳止まり)を設け、定年後は「旧」の人になってもらふ。これは、ひきつぎ出世主義社会であつて、つづけるであろう日本においては、きつて大事な指図だと私は思う。

(一九九四年一月二七日、東京新聞)

- * 冷戦の終結後、国民国家の亡霊がさまよっているという神島の指摘は重要である。今日のイラク問題、特にアメリカの対応を見るとこのことは重要である。アメリカの多人種性はあくまでネーションステイツの延長線上で発想されたものであることを銘記すべきである。(この点は現代アメリカ論のひとつの重要な観点となるであろう。アメリカはもちろん多民族国家なのであるが、その多民族のまとめ方が、ネーションステイツのまとめ方そのものであるという点である。アメリカは同時に「理念の共和国」といわれるが、まさしくその理念が近代ネーションステイツの理念である。この点はヨーロッパ共同体やカナダなどに比較してかなり明確に論じることができるのではないか。アメリカのことを「人種の坩堝」というのに対してカナダを「モザイク国家」と称する。さてヨーロッパは今どのような呼称でその多人種性・他民族性を表現しようとしているのだろうか。)「民族」は同化同質の純粋化志向を持つという指摘も重要である。この点で言えばイラク戦争においてラムズフェルドは「新しいヨーロッパ、古いヨーロッパ」という言い方をしたが、実はもっと大きな新旧の対比がある。それは「新しい西欧、古い西欧」で

ある。統合が進むヨーロッパは近代のネーションステイツを超える、無効化する異種雑多の共存志向を持つ新しい西欧であるが、アメリカは近代そのものであるといえる。今回の一連イラク進行をめぐる米欧のリーダーたちの言説の中には、かなり文明史的、哲学的テーマがあったということである。

- * <民族>は近代以後の固い統合を求めた国民であると神島は考える。そして期待できるのは民族よりも<常民>ではないかと考える。そして政治も、つまり人を動かす手段の体系も歴史的には固定から非固定へ、厳から暖へ移行する傾向があると考え。脱支配元理の傾向があると神島は考える。ここから先は元理表の解説となる
- * この中で注目すべきことのひとつは世論と人心の問題である。人心は耳目に触れる感触を機縁にするというところが重要なのだろう。補欠選挙での田舎での敗北はこのことを言っているのだろう。ポスターそのほかでの耳目を超えて、<感触>にまで訴えない限り、人心には繋がらないということであろう。
- * この元理表の解説のなかで、もうひとつ注目すべきは16p、6行目「同化元理は議会政治からは完全に排除しなければならない。過去イギリスではそうした」と論じている点。また天皇家は議会政治から最も離れた存在であり政治家は議会政治に真正面から取り組むべしとしている点である。神島の中で「議会」は、様々な政治的営みの中で、どのように位置づけられていたのだろうか。それはもちろん西洋近代の光の部分、即ち「自治」元理の具体的な核心部分であるが、それを決して過小評価していないのである。「帰郷」をはじめとする「自治」「支配」以外の政治元理の抽出を試みつつも、だからといって彼はこのいわば西洋近代の光の部分である<自治元理>とその核心である議会を価値相対的に見ているわけではない。(神島の元理表はどのように読まれなければならないのだろうか。それは、それぞれの元理と親和性を持つある政治現象を、あるいはある政治体の特徴を平面的に元理表に帰納させるのではなく、政治現象の見えないひだに細かく、想像的に入り込みつつ、一方でそのことが価値判断を曇らせることのないよう心することではないだろうか。)大雑把に言えば神島は実は近代を評価している。そして共和主義者である。ここまでは丸山真男と実はまったく同じなのである。しかし、さらにその近代の一步先を見据えてゆこうとしている。(いわゆる丸山シュレーが現在ただいまのこの国内外の政治状況の中でここまで無力化していることの意味を我々は本当にどう考えたらよいのだろうか。)